北区の古城ミステリー！

長場館の伝説地（城ノ潟）

■長場館

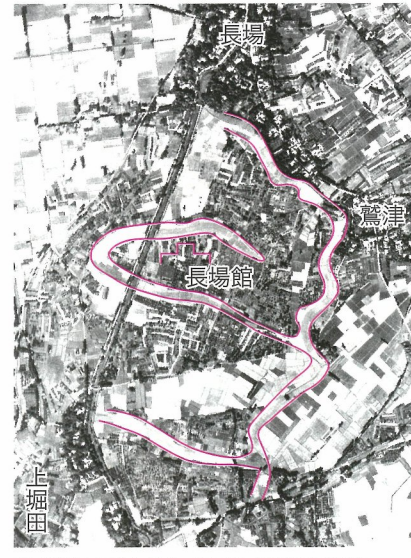
長場から上堀田の付近に「城ノ潟」と呼ばれている場所があります。ほかに「城ノ腰」・「外城」・「内城」などと呼ばれる小字名も残っていて、中世に「城館」があったと伝えられています。この城館は「長場館」「里飯野の館」といわれています。

城館の大きさは、東西約540m（300間）、南北が約324m（180間）ほどで、駒林川の流れを利用した外堀と、その内側に楕円形の内堀が造られていたようです。堀の幅はどちらも約54m（約30間）といわれています。長場館は、駒林川の自然堤防とその背後にあった広大な湿地や潟を利用した要害で「潟に浮かぶ城」だったのでしょう。

当時、ここは白河荘と日本海を結ぶルート上に位置し、人や物資が行き来する重要な場所であったと考えられています。館の近くには、「鷲津」という船着場があったと考えられるので、市場が立つなど交易の場所として賑わっていたと想像されます。

さて、長場館は誰の城だったのでしょうか。里飯野や山飯野の付近を本拠地として活躍したこの地の土豪飯野氏の居城であったという伝説や、上杉氏家臣の長尾三郎右衛門から小四郎景行までの4代の居城であったという伝説が残っています。土豪飯野氏については詳しくわかっていませんが、長尾景行は永正年間（1504〜21）に実在した人物です。

また、地元では、永正年間に上杉謙信の父長尾為景によって滅ぼされた城であるとも伝わっています。



長場館付近とそれを囲む旧駒林川跡
1948（昭和23）年
提供／国土地理院

『北区お宝ものがたり』は、博物館などで1冊800円で頒布しています。